

# 英語を媒介とする認知言語学用語の日中翻訳

— 理論と実践のインターフェース —

段 静 宜

## 1. はじめに

認知言語学は、1970年代以降、主として欧米の学界で発展してきた学問領域である。そのため、この分野の核となる概念や理論の多くは、まず英語の用語として確立され、その後、日本を含む世界各国に取り入れられてきた。日本の学界では、これらの英語由来の用語を受容する過程で、漢字を用いて意識する場合と、外来語で音写する場合が混在するという特徴的な状況が生まれていった。このような複雑な状況の下で、日本の認知言語学著作を中国語へ翻訳する際には、以下の三つの課題が現れる。

第一に、漢字で表記される用語には、日中両言語における「同形異義」の関係にあるものが少なくない。日本語の漢字表記に引きずられた安易な転写は、中国語読者にとって概念の誤解や伝達の不正確さを招くリスクが極めて高い。第二に、外来語で表記される用語には、中国語に対応する定着した訳語が存在しない「概念的空白」が生じており、その本質を捉えた新たな訳語の創出が求められる。第三に、いずれの形態であれ、多くの用語において中国の学界では複数の訳語が併存しており、統一が図られていないのが現状であり、文脈に応じた最適な訳語を選択するための明確な基準が必要とされている。

以上のような問題意識に基づき、本研究では、これらの課題を克服するための方法的ストラテジーとして、英語を媒介とした概念的照合のプロセスを提案する。具体的には、日本語の用語を中国語へ翻訳する際、一度、英語という原義に最も近い「共通尺度」へと立ち返り、概念の核心を再把握したうえで、適切な中国語訳を導出するという手法を採用する。本研究では、この「日本語→英語→中国語」という概念的検証プロセスを中核的アプローチと位置づけ、山梨正明(2021)『言語学と認知革命—認知言語学への展開』の中国語翻訳実践を具体的な分析対象とし、その有効性を検証する。

本研究は、記述的用語論の観点から用語の使用実態を記述・分析し、同時にナイダの機能的等価理論を参照しつつ、用語翻訳における概念的等価性と文化的適応性のバランスを探求する。

分析対象は、主に以下の三つの基準に基づいて選定した山梨（2021）中の用語である。

- ①学際性：複数の学問領域にまたがり、意味が特殊化している用語
- ②文化的負荷：特定の文化的・哲学的背景を持ち、直訳が困難な用語
- ③歴史的変遷：時代とともに意味が変化してきた用語

これらの事例分析を通じて、認知言語学に限らず、学際的分野における用語翻訳の一般的方策を探求することを目指す。

## 2. 用語翻訳の基準及びその理論的枠組み

### 2. 1 用語翻訳の基準

いかなる文章の翻訳においても、まず正確な用語を定めることが第一歩であり、これが欠ければ翻訳作業自体が成立しない。同時に、翻訳を通じて思想を伝達するためには、正確な訳語、特に用語の訳語が不可欠である。この意味において、用語翻訳はあらゆる翻訳の最終的な帰着点でもある。用語翻訳が不正確であれば、翻訳全体の失敗につながる可能性がある。

用語翻訳の基準について言えば、正確性が第一原則である。オースティン（1962/1975）の三種類の発語行為理論における「illocutionary act」を例にとると、中国語では“言外行為”という訳語が用いられている。言語表現と実質行為は従来、対立する概念と考えられてきたが、オースティンはこの二分法に疑問を呈し、発話そのものが行為の一形態であると提唱した。特に彼が着目したのは、単なる物理的発声行為（「locutionary act」）ではなく、その発話内に込められた話者の意図を実現する行為、すなわち「illocutionary act」の重要性であった。このオースティンの理論体系に照らせば、「illocutionary act」を“言外行為”とすることは、正確性を欠く訳と言える。姜望琪（2005：82）は「流暢さを追求するために概念の正確な伝達を犠牲にしてはならない」と主張し、「正確であれば、たとえ読みにくくてもかまわない」との立場をとっている。

ただし、注意すべき点は、用語翻訳においては、正確性のみが唯一の基準ではないということである。優れた訳語には、可読性、すなわち実際の使用に耐えうる実用性が求められる（姜望琪 2005）。過去に「illocutionary」を“話中”と訳出しようとした試みがあったが、これは中国語に“話中有話”という既存の表現があり、ごく自然に受け入れられると期待されたためである。しかしながら、この表現は用語としての定着性に欠け、説明調の表現にとどまっている。一方、“言外行為”という訳語を支持する立場には、可読性を優先し、“言外之意”という慣用表現との親和性を考慮した判断が働いている可能性が考えられる。

さらに指摘すべきは訳語の透明性である。訳語の透明性とは、読者が訳語から元の語を容易に識別し、容易に逆翻訳できることを指す。たとえば、「framework agreement」を「枠組み協定」、「field work」を「フィールドワーク」と訳す場合がこれに該当する。このような透明性を有する訳語は、使用開始当初には外部の人にとっては違和感があったり、意味が理解できなかつ

たりすることがあるが、時には訳語の正確性を担保する効果もある。

上記の問題に対し、姜望琪（2005）は、用語翻訳においては、可能な限り正確性、可読性、透明性を両立すべきであるが、正確性については妥協できず、場合によっては可読性と透明性の一部を犠牲にしてもかまわないと指摘している。羅耀華・周晨磊（2011）は、各研究者の翻訳原則を整理している（表1参照）。研究者ごとに用語翻訳における重点は異なるものの、正確性、可読性、透明性は用語翻訳の重要な基準となっている。

表1 各研究者の翻訳原則

研究者	翻訳原則
于偉昌	単義性、根拠性、体系性、簡明性、生産性
張旭	透明性、一貫性、簡潔性
姜望琪	正確性、可読性、透明性
趙学徳	正確性、一貫性、透明性、達意性、簡潔性
侯国金	体系性—識別可能性
尹洪山	正確性、透明性、簡潔性
張曉勤・任沢湘	正確性、統一性、実用性
況新華・呉丹	正確性、機能的対等性、実用性

（羅耀華・周晨磊 2011：26頁）

## 2. 2 理論的枠組み及び研究方法

1990年代、用語研究は「認知的転向」(cognitive shift)、すなわち規範性から記述性への転換を迎えた（徐建国 2021）。従来の用語規範論が単義性、透義性、安定性を主張するのに対し、用語記述論は多面性、換喩性、変動性を認める立場をとる。事実として、テキストが描く知識は概念的には動的であり、言語表現においては可変的である（Rogers 2004）。記述的用語論は、実際の使用場面における用語の実態を記述分析することを重視する。本研究では、この立場から、「グレイディエンス」「身体性」などの用語について複数の訳語が併存する現象を、単なる「不統一」として非難するのではなく、その多義的な原因と社会的受容を分析の対象とする。

ナイダの「機能的等価」理論は、原語テキストと目標言語テキストが形式と内容の両面において可能な限り一致することを重視する（Nida 2004）。同時に、この理論はテキストのコミュニケーション機能をより重んじ、目標言語の読者が原語テキストの情報を十分に受け取り、原語の読者とほぼ同様の反応を示し、よく似た読書感覚と審美体験を得られることを目指すのである。本研究では、この理論を応用し、用語翻訳においても、概念的等価性の達成を最優先目標としつつ、目標言語の学術共同体における自然さと受容可能性を同時に追求する姿勢を採用する。

以上二つの理論を組み合わせ、本研究では正確性（概念的等価性）、可読性（自然さ・受容可

能性)、透明性(原語との識別容易性)という三つの基準を中核的な評価の枠組みとして設定し、この枠組みに沿って具体的事例を分析していく。

本研究では、日本語から中国語への翻訳という主要な経路において、英語が重要な「媒介言語」あるいは「参照枠」として機能するという動的な関係性を重視する。学術翻訳、特に日中のような非欧米言語間の翻訳においては、「媒介言語」としての英語の役割は極めて重要である。本研究では、この観点を取り入れ、分析プロセスに以下の原則を組み込む。

まずは、概念的な照合を行う。日本語の用語とその中国語訳の対応関係を評価する際、英語の対応語を共通の基準点として参照し、概念的ズレが日中のどちらの側に生じているかを特定する。そして、訳語生成の経路に注目する。ある概念が英語→中国語、英語→日本語と並行して取り入れられたことを意識しつつ、訳語の選択を考察する。さらに、国際的通用性を常に意識する。中国語の訳語が、日本および欧米の学界の学術コミュニティにおいても通用しうる透明性を備えているかどうかを、用語の国際化という観点から評価する。

### 3. 学際的用語の翻訳課題についての考察

認知言語学は、科学哲学、心理学、現象学などの分野と関連するため、言語学には多くの学際的用語が取り入れられている。たとえば、「共約不可能性」(incommensurability)は数学に由来し、クーン(1996)により科学哲学に持ち込まれ、さらに言語学の分野に入ってきた用語であり、その翻訳には元の意味と学術分野における文脈の両方を考慮する必要がある。

「共約不可能性」はクーンが数学から借用した概念で、科学発展における概念として、異なる科学パラダイム間の基本概念、理論、方法などが言語や証拠を通じて正確に対比・比較できず、そのため対話や議論を通じて合意に達することができないことを指す。まず、数学的概念が科学哲学の思想に取り入れられたこと自体が、用語が学際的属性を有することを示している。さらに、言語の本質から見れば、いかなる二つ(またはそれ以上)の言語間にも必ず、ある程度の「共約不可能性」が存在する。これこそが用語翻訳の難しさの核心である。

#### 3. 1 「グレイディエンス」の事例

学際的用語の翻訳において核心となる課題は、原義の厳格な保持と、目標学問分野における有効性との緊張関係である。本節では、数学・物理学から言語学へと取り入れられた「グレイディエンス」の翻訳を検討し、この課題の解決法を模索する。

##### 例1

生成文法に代表される形式文法のアプローチでは、文法は有限の規則からなり、この規則の再帰的な適用により、形式的に適切な文の集合を生成する規則依存型のモデルとして規定される。そし

て、この規則依存のアプローチにより、無限に可能な文を生成していく創造的特質（すなわち、規則支配の創造性）が捉えられるとされる。しかし、実際の間人が使用する言語表現の分布は、生きたコミュニケーションの文脈のなかでその使用範囲が限定されており、このような規則依存のアプローチでは一律には予測できない。この点は、イディオム的な表現のグレイディエンス的分布、プロトタイプ的な表現と拡張表現の相対的な分布の予測に関しとくに問題となる。（山梨 2021：16）

ここで注目すべきは、「グレイディエンス」という語の翻訳方法である。「gradience」は言語学用語として『牛津高階英漢双解詞典』に収録されておらず、同辞典には関連する物理学・数学用語である「gradient（変化率、勾配曲線）」のみが掲載されている。言語学の分野には「gradience」が取り入れられ、『朗文語言教学与应用語言学詞典』（2005：280）では「一つの言語単位から別の言語単位への漸次的な移行を表すために使用される」と解説されている。

羅耀華・周晨磊（2011）が、学術論文で使用されている「gradience」に関する調査を行ったところ、11種類の訳し方があることが判明し、最も一般的なのは“遞差”と“梯度”であった（表2参照）。

表2 「gradience」の中国語訳語及び出現頻度

訳語	頻度
遞差	12
梯度	14
隸属度	2
斜坡性	1
層階（性）	6
変化（性）	3
標度	1
漸進	1
梯級	2
級差（性）	1
坡度	1

（羅耀華・周晨磊 2011：24頁）

この語をより正確に理解するため、羅耀華・周晨磊はその基本的な用法を考察した。「gradience」は欧米の言語学界では多様な用法があるが、最も基本的な二つの用法は「カテゴリー間の境界の性質」「カテゴリー内部の構成員の組織順序」である。さらに、一部の研究者は「言語システムにおけるカテゴリーの交錯」も基本的な用法に含まれると考えている。宋志平（2000：56）は「gradience」について「対立または差異の間に漸次的な変化を示す中間的な移行形態が存在し、それは両端の特徴を融合し、『亦此亦彼（これでもあり、あれでもある）』であり同時に『非此非彼（これでもなく、あれでもない）』であり、曖昧な性質を有する」と解説している

が、これは実質的に「言語システムにおけるカテゴリーの交錯」を指している。ただし、「gradience」の意味には単なる曖昧さだけでなく、ある種の順序的配列も含まれている。二つのカテゴリーの中間に位置するものは両義的な中間成分であり、これらの中間成分はいずれかのカテゴリーとの類似度に基づいて順序づけられる。

ここからわかるように、中国の研究者が「gradience」を“遞差”または“梯度”と訳すのは、いずれもその本来の意味をよく捉えていると言える。“斜坡性”“坡度”は用語としての特性に欠け、“漸進／変”は構成員間の地位の差異を表現しておらず、“隷属度”はある構成員を他の構成員の下位概念とみなしてしまうため、原義と合致しない。筆者は“梯度”と訳すのが適切であると考え。その理由は、“遞差”では数学用語と誤解されてしまう可能性があるためである。

以上の分析が示唆するのは、学際的用語の翻訳においては、その概念の起源を遡り、目標とする学術分野における意味の拡張を結びつける必要があり、直訳による概念の歪みを避けなければならないということである。「グレイディエンス」の場合、“梯度”という訳語は、数学的起源を示唆しつつも、言語学の文脈において「連続的で順序づけられたカテゴリーの境界」という概念を明確に表現できるという点で、機能的等価性と受容可能性のバランスが取れている。

### 3. 2 「身体化」の事例

「embodiment」は認知言語学における中核的概念であり、認知と意味構築が身体的経験と密接に関連していることを強調する。この概念は哲学と心理学に由来し、「身体化認知」(embodied cognition)の理論的背景を有する。中国語では、「embodiment」に対して“具身性”“体験性”“涉身性”など複数の訳語が現れており、概念理解における異なる重点を反映している。

#### 例 2

認知言語学は、単に理論言語学の一理論として位置づけられるその研究プログラムの背景には、身体論的な哲学に関わる人間の心、意識、概念体系のメカニズムに関する次のような見解が存在する：A. 心は身体化 (embodied) されている、B. 思考の大部分は認知的に無意識的 (cognitively unconscious) である、C. 抽象的な概念体系はメタファー (i.e., conceptual metaphor) に根ざしている (Lakoff and Johnson 1999: 3)。 (山梨 2021: 99)

「身体化」(embodied) は、認知言語学における重要な用語であり、身体に基づく知覚能力を強調している。現在、中国の言語学分野においては「embodiment」の三つの訳語“具身性”“体験性”“涉身性”が併存している。「embodied」が“体験的”、「embodiment」が“体験性”と翻訳されているのは意識的方法であり、用語の簡明な特性に合致している。「embodiment」が“具身性”と翻訳されているのは直訳的方法であり、原語の文字通りの意味である「身体具体化」に忠実である。

張麗芳（2017）が、中国知網（CNKI）に収録された上記の異なる訳語を含む論文のタイトルについて統計を行ったところ、“体験性”と翻訳されたものは107件（言語学101件、芸術6件）、“具身性”と翻訳されたものは50件（言語学15件、心理学21件、哲学10件、芸術4件）、“渉身性”と翻訳されたものは22件（言語学10件、心理学8件、哲学4件）であった。総頻度と被引用数から研究者個人の受容度を観察すると“体験性” > “具身性” > “渉身性”、学術誌のインパクトファクターから研究者集団の受容度を観察すると“具身性” > “体験性” > “渉身性”の順となった。結論として、“体験性”の使用頻度が最も高いが、“具身性”はより学術分野の集団から認められているということがわかる。

複数の訳語が併存する場合、その選択は主要な学術分野によって決定されるため、理論的には原語の「embodiment」は心理学分野の訳語と一致させ、“具身性”と翻訳すべきである。上記の中国知網のデータも、“具身性”の研究者集団における受容度が最も高いことを示している。しかし、用語の体系的に基づけば、副次的な学術分野ですでに確立された使用習慣を無視することはできず、“体験性”は言語学の分野において使用習慣が確立され、その研究者個人における受容度が最も高い。これは、その訳語の符号が簡潔で意味が透明であるという特徴によるものである。複数の訳語が併存する場合、学術分野の源、使用頻度、集団の受容度を総合的に考慮して最大公約数を求めたうえで、体系的なテキストの中では訳語の一貫性を保つべきである。

筆者は「embodiment」を翻訳するにあたり、本書の読者層が言語研究者に限らず、他分野の読者にも及ぶことを考慮した。そのため、言語学用語としての色彩がより強い“体験性”よりも、可読性と透明性に優れる“具身性”を訳語として選択した。この事例は、学際的用語を翻訳する際には、その由来、言語学的文脈、集団の表現習慣および読者層を総合的に考慮し、概念の正確性と読者の受容度を両立させる必要があることを示している。

#### 4. 文化・哲学的概念の翻訳課題についての考察

以上で検討した学際的用語の課題は、主に異なる学問分野間における概念の移動と適応に焦点を当てた。しかし、認知言語学が対象とする用語には、さらに根源的な難しさを伴うグループが存在する。それは、特定の文化圏や哲学的思潮に深く根ざし、それ自体が独自の世界観や認識論を内包する概念である。このような「文化的負荷」の高い用語は、単に学際的であるのみならず、目標言語の文化において直接的な対応物を持たない「概念的空白」を生み出すことが多い。そのため、翻訳においては、言語表層の変換を超え、原概念の哲学的・文化的な核心をいかに捉え、目標言語の学術ディスコースの中で再構築するかが問われる。本章では、こうした文化・哲学的概念の翻訳に伴う特有の課題を、「環世界」(Umwelt) と「メタ」(meta-) の事例を通して考察する。

#### 4. 1 「環世界」の事例

文化や哲学に深く根差した概念は、目標言語においては往々にして直接的な対応物を持たない。このような文化的負荷の高い用語の翻訳には、単なる言語変換を超えた概念的再構築が求められる。本節では、「環世界」(Umwelt)の翻訳をめぐる議論を分析し、このプロセスを詳細に検証する。

##### 例3

ユクスキュルは、このように生物がそれぞれの感覚や身体を通して生きている世界を、『生物から見た世界』という著書において、「環世界」(Umwelt)と名づけている (cf. ユクスキュル&クリサート (1995))。彼は、生物が生きる環世界の具体例として、マダニの「環世界」をあげている。マダニには、視覚や聴覚に関わる器官は備わっていないが、嗅覚、触覚、温度感覚がすぐれている。(この生き物にとっての世界は、見えるものでも聞こえるものでもなく、温度と匂いと触覚できている。) マダニは、木の上から下を通りかかる哺乳類が出す匂いを感じて木から落ちる。運よく獲物の上に落ちることができたら血を吸うことができるが、たまたま獲物が木の下を通りかかるまでひたすら待ち続けなければならない。ユクスキュルの「環世界」で重要な点は、マダニ独自の有する感覚器によって知覚される世界と身体を使って世界に働きかける世界が迎携することで、他の生物とはことなるマダニ独自の「環世界」が作られている点である。マダニの場合には、哺乳類の発する酪酸のこの観点からみれば、生物の一種である人間も、独自の感覚器と身体を介して知覚される「環世界」のなかで生きており、この独自の知覚経験によって世界を解釈し、意味づけしていることになる。(山梨 2021 : 128)

ユクスキュルは生物がそれぞれの感覚と身体を通じて生きている世界を「環世界」と名づけた。彼はマダニの「環世界」を具体例として挙げ、生物が生きる環境界を描写している。では、この「環世界」は、中国語にどのように翻訳すべきか。

「Umwelt」はドイツ語に由来する語であり、『オックスフォード英語大辞典』(2004 : 3407)の定義によれば、「その中に生息する有機体に影響を及ぼす外部の世界または現実」を指し、同辞典は「Umwelt」を英語の「Environment」と同義語とみなしている。これは「Umwelt」の基本的な辞書上の意味、すなわち文字通りの意味である。しかし、ソシュール、ヤコブソンらの言語学・記号論の視点から見ると、「Umwelt」という語は様々な文脈で使用される過程において、英語の「Environment」や中国語の“環境”と意味が同等ではなく、生物学、生物記号論、現象学、解釈学などの理論的背景を有する特殊な「環境」を指すため、多様な語義的価値とそれぞれ異なる内包を有している。

簡瑞碧 (2005) は「Umwelt」を“環境界”と翻訳しており、これは中国の一部の研究者にも採用されている。「Umwelt」が多義性を有することから、中国の学界においては“周圉世界”“周圉環境”などと翻訳する研究者もいるが、このような表現の改変は、過度な解釈の特徴を有している (唐珂 2013)。張琳琳 (2019 : 11) は「どの生物もそれぞれ、自身のUmweltを持ち、そ

の中には生物が環境内で知覚でき、かつその進行中の活動に関連する事物が含まれている」と強調している。ユクスキュルによる「Umwelt」概念の受容過程とその思想の変遷を概観すると、「環境」「周囲環境」「心像世界」「主体世界」「環境界」などの訳語では、ユクスキュルの体系的な理論—すなわち、生理学的環境を含み、かつ哲学的な意味における意味体系構築に関する完全な理論的意義—を概括することはできないことがわかる。そのため、一部の研究者はユクスキュルの「Umwelt」を「主体環境域」と翻訳している。これは、この訳語が主体世界を含むとともに、環境の意味合いも包含するためである。

筆者は翻訳にあたり、まず日本語の漢字「環世界」を直訳する案を排除した。中国語には「環世界」という概念が存在せず、直訳ではその意味が理解不能に陥る危険性が残るためである。さらに、この用語自体が言語学の専門用語ではないことを考慮し、「主体世界」や「主体環境域」といった心理学・生理学的色彩の強い訳語を採用すれば、かえって可読性を損なう懸念があった。以上の検討を踏まえ、最終的には「環境界 (Umwelt)」という、中国語訳と原語を併記する方式を採用した。これは、正確性と可読性の両立を図るとともに、原語への遡源性を担保する有効な方策であると判断したためである。

「Umwelt」の訳語として「環境界」「主体環境域」などが提案されてきたことは、この概念の多義性と哲学的深度を反映するものである。これらの訳語は、単なる「環境」を超え、生物の知覚と行為によって構成される独自の世界という核心的意味を伝えようとする試みである。この事例は、文化的負荷の高い用語の翻訳においては、可読性を追求するあまりに正確性が損なわれる危険性と、正確性を追求するあまりに可読性が低下する危険性、その両方と常に向き合わなければならないことを示している。この種の「文化－理論」型用語の翻訳においては、文字通りの対応を超えて概念の再構築を行う必要があり、必要に応じて「訳語＋原語」の方式を採用し、理論的内包が完全に伝達されるように図る必要がある。

#### 4. 2 「メタ」の事例

「meta-」はギリシャ語に由来する接頭辞で、「～に関する」「～を超えた」「より高次元の」などの抽象的な意味を表すために広く用いられる。中国語では、「metaphilosophy」「metalanguage」などの用語が、しばしば「元哲学」「元語言」と単純に翻訳される。しかし実際には、「meta-」と「元」の本来の意味は完全には一致するものではなく、これも概念の混同と理解の偏りを招く結果につながっている。

##### 例 4

生成文法が前提とする解釈意味論のアプローチでは、上記の図 1 から明らかなように、意味は文法の統語部門で規定される統語表示に対する意味解釈によって規定されるが、意味解釈のアウトプットとしての意味表示は、メタ記号としての意味標識 (semantic markers) によって規定される記号表示である。この種の記号表示それ自体は、日常言語の意味ではなく、あくまでメタレベルにお

ける記号表示にとどまる。言語学における意味論（ないしは言語科学における意味論）の構築に際しては、この種の記号系に対し、（意味の伝達と理解に関わる）記号系の外部の世界からの経験的な動機づけが与えられなければならない。（山梨 2021：44）

認知言語学の用語はしばしば「メタ認知」的な特徴を有する。たとえば接頭辞「meta-」を含む語群の翻訳（“元哲学”“元言語学”“元叙述”“元文化学”“元理論”“元話語”“元基準”“元批評”など）が挙げられるが、これらの用語は通常、翻訳という過程を経て形成されたものである。では、この“元”という字は一体、どのような意味を有するのだろうか。辜正坤（1998）は、“元”の意味を二つの側面から理解すべきだと指摘している。一つは漢字“元”の本来の意味であり、もう一つは原語の用語の本来の意味である。

元、始也。（『説文解字』）

元者、万物之本。（『春秋繁露・重政』）

このように、中国語における“元”という字は、「根本的な」「主要な」または「大きい」という意味で理解されるべきである。“元”は古代中国語においても現代中国語においても常用字であり、“元凶”“元古”“元由”“元本”“元老”“元年”といった語からもわかるように、その基本的な語義は、驚くほど一貫性を保っている。

次に、用語の中で“元”という字に翻訳された要素である「meta-」の意味について見てみたい。「meta-」は古代ギリシャ語の接頭辞で、「～と共に」「～の後で」「～の外で」「～の間で」「～の中で」といった意味に理解されるが、「根」「本」「始」といった意味は持っていない。そのため、厳復はアリストテレスの「Metaphysica」（原義は「物理学の後に編纂された著作」）を“形而上学”と翻訳し、“元物理学”とは翻訳しなかった。また、一部の研究者は英語の「metamyth」を“元神話”ではなく“超凡神話”、「metapolitics」を“元政治学”ではなく“哲学政治学”または“理論政治学”と翻訳している。

しかし、多くの翻訳者は区別することなく、「meta-」を一律に“元”と翻訳し、前述した“元哲学”“元語言”“元科学”のような理解しにくい訳語を生み出してしまった。もし人々が文字通りの意味から“元語言”や“元言語学”を本体言語や本体言語学などと誤解すれば、大きな間違いとなる。なぜなら、このように翻訳された用語、たとえば“元語言”は、実際には我々が本体言語（または対象言語）について議論する際、この言語を説明するために他の言語を使用せざるを得ないことを指すからである。このように本体言語を説明・議論するために使用される言語を「metalanguage」と呼び、「説明語言」または“道具語言”などと翻訳することができる。したがって、「meta-」を単純に“元”に対応させるのではなく、具体的な文脈に基づいてその高次の抽象的意味を理解すべきである（成暁光・姜暉 2008）。

筆者はこの種の翻訳を扱う際、たとえ“元”の本来の意味が「meta」と完全には一致しないとしても、“元語言”“元認知”“元符号”がすでに言語学用語として定着し、高い認知度と受容度を有することを考慮し、通用性の観点から、“元語言”“元認知”“元符号”という表現を引き続き使用することを選択した。しかし、これと比較した場合、“超語言”“超認知”“超符号”の方が正確性と可読性の両方をより兼ね備えているのではないだろうか。この種の接頭辞を含む用語を翻訳する際には、「偽対応」に警戒し、文脈分析と概念の起源への立ち返りにより、語形に基づく誤解によって原義が歪められるのを避けなければならない。

## 5. 歴史的変遷の翻訳課題についての考察

学際的広がりや文化的深度のほか、用語翻訳が直面する第三の重要な次元は時間的、すなわち通時的変遷である。これまで見てきた課題が主に概念的空間の広がりや深さに焦点を当てていたとすれば、ここで問題となるのは、概念そのものが歴史の流れの中で意味を変容させてきたという事実である。このような「歴史的変遷」を経た用語は、特定の時代や文脈に固定された一つの訳語を当てはめることが原理的に困難であり、翻訳者には縦断的な歴史意識と、文脈に応じた柔軟な判断が強く要求される。本章では、アリストテレスに端を発し、その意味を時代とともに刷新してきた「トピカ」(Topica)の事例を通じて、歴史的脈絡を無視すれば成立しない翻訳のあり方を探る。

### 例5

ヴィーコは、近代ヨーロッパ諸学を支配してきたデカルトの「クリティカ」の理知的方法に基づく学問観を批判し、人間の創造力の根源としての共通感覚の場である「トピカ」に基づく学問観を提唱する。デカルト的な「クリティカ」に基づく学問観においては、知識は確実で明証的な真理の対象であり、共通感覚の身体的な経験に関わる知識は排除される。これに対し、ヴィーコは、共通感覚の場としての「トピカ」を、人間の創造的な真理の探求ための〈論拠の場〉として重視する。  
(山梨 2021 : 129)

「Topica」は、アリストテレスによって2000年以上前に創始された学問である。その歴史的過程において、この語の意味は絶えず変化してきた。その当初の意味は「特定の命題を証明するための論拠を見つける学問」であったが、アグリコラはその意味を“論題目録”に改めた。その後、ヴィーコはその意味を反科学主義的な研究方法として再定義した。したがって、「Topica」という語には不変の意味はなく、この語が置かれた歴史的時期に応じてその意味を定め、それに応じて訳し方を決定しなければならない(徐国棟 2015)。たとえば、最初の歴史的時期における「Topica」は“地方論”、第二の歴史的時期における「Topica」は“論題目録”、第三の歴史的時期における「Topica」は“地方論的方法”とそれぞれ翻訳される。この種の用語の翻訳に

においては、歴史的な文脈との連関が不可欠であり、一概に論じることはできない。歴史的な特性を有する用語の翻訳においては、現代の意味を古代の語に当てはめたり、概念の時代的特徴を見落としたりすることなく、縦断的な観察意識をもってその意味の変遷の軌跡を理解する必要がある。

上述した「トピカ」の異なる意味内包を考慮し、筆者は翻訳の過程において英語原文である「Topica」をまず前に置き、その後ろに該当する中国語の意味を注記する方法を選択した。たとえば、学問観の基礎を表す場合には“Topica（地方）”と訳し、論点や論拠の方法を表す場合には“Topica（論題）”と訳すという具合である。英語をそのまま使用する方法は、その正確性と透明性を最大限に担保することができ、同時に後ろに中国語の解釈を注記することで訳文の可読性を高め、正確性、可読性、透明性のバランスをとることができる。

このように明らかな歴史的変遷を有する用語に対しては、翻訳者は現代的概念を古典用語に無理やり当てはめるのではなく、縦断的な歴史意識をもって文脈に基づいてその具体的な指示対象を判断する必要がある。重要な概念箇所には注記を加えてその歴史的変遷を説明し、訳文の学術的深度と正確性を高めることが望ましい。

## 6. 用語翻訳の現状と方策

現在、中国の日本語学界においては、使用される用語に明らかな「日本語化」の傾向があり、たとえば「音素」「語彙」などの日本語の漢字用語をそのまま借用するケースが多い。しかし、これらの用語は中国語において訳語がすでに存在することもあり、また、概念の指示対象が必ずしも一致するとは限らない。この「漢字同形」によってもたらされる利便性は、かえって用語の混同と学術的隔たりの潜在的な原因となっている。さらに、日本語学界における欧米理論の紹介は、しばしば日本人研究者による再解釈を経て「理論変異」を形成するため、日中間の用語の整合を一層困難にしている。潘鈞（2021）は、体系的な用語の対照と規範メカニズムの欠如が、日中言語学の深みある交流を妨げる構造的な問題になっていると指摘している。

用語は翻訳ではなく、少なくとも厳密な意味における翻訳ではなく、用語の背後にある特定概念を母語によって転換または置換するものであり、その前提は概念の内包と外延が厳密に対等であることに基づかなければならない。異化（直訳的、外来語の多用、原語の表現形式や文化的要素をそのまま移植する）と帰化（意識的、目標文化における既存の表現や概念への置き換え、文化的アダプテーションが行われる）は本来翻訳ストラテジーであるが、用語には適用できない。

前文で分析した事例から明らかなように、多くの用語は学際的な特徴を有しており、このような状況下で日本語の用語を直接引用すると、概念の理解に偏りが生じやすい。したがって、英語を媒介とし、国際的に通用する訳し方を参考にしつつ、中国の言語学界の用語体系との整

合を図り、概念の一貫性を担保すべきである。具体的には、日本語の用語を中国語に転写する前に、その概念に対応する英語表現をまず確認し、国際的に共通する中核的概念を把握したうえで、中国語の用語体系の中から最適な訳語を選択するというプロセスが有効である。これは、「日本語→中国語」の直行経路から、「日本語→英語→中国語」という概念的検証を経た体系的な経路へと転換することを意味する。このような状況を踏まえ、日中両国の言語を対照的に検討したうえでの用語体系の整備や、概念の整合性を中核とする標準化用語データベースの構築が求められている。そのため、国内外の用語対応リストを整備することは急務であり、用語の標準化と体系化を進めることにより、学术交流の基盤となる信頼性の高い枠組みを提供すべきである。

## 7. 結論

本研究は、記述的用語論と機能的等価理論に基づく分析の枠組みを用い、認知言語学用語の翻訳が抱える課題を、日中英対照の視点から体系的に考察した。主な発見は以下の三点に要約できる。

第一に、学際的用語の翻訳には、概念の起源を理解したうえで、目標分野における意味の拡張を適切に取り込む適応的翻訳が求められる。「グレイディエンス」の“梯度”への訳、「身体化」の“具身化”への訳は、原義を保持しつつ言語学の文脈で機能する事例である。

第二に、文化的・哲学的概念の翻訳は、字義的対応を超えた概念的再構築のプロセスである。「環世界」や「メタ」の事例が示すように、訳語は原の概念の核心的意味を伝えつつ、目標言語の学術的ディスコースに統合されうるものでなければならない。しかし、「メタ」の“元”への訳は、定着したものの、再考慮の余地が十分にある。

第三に、歴史的用語の翻訳は、その通時的变化を無視しては成立しない。歴史的に意味が変遷してきた「トピカ」のような用語に対しては、固定的な一つの訳を求めるのではなく、それを取り巻く歴史的な文脈に応じた柔軟な訳し方が不可欠である。

これらの事例は、用語翻訳の基準である正確性・可読性・透明性が、静的な指標としてではなく、翻訳される概念の特性的（学際性、文化的負荷、歴史性）に応じて動的に重みづけされ、バランスをとられるべきであることを強く示唆している。

中国の日本語学界が日本の学界から借用した理論は、国内の言語学界が欧米から直接取り入れた理論との間に、大きな差異が生じることがある。中国人として日本語を研究する視点と研究動機は、日本人とは当然異なる。さらに、欧米に由来する言語学理論は日本に持ち込まれると一定の変異を起こし、中国に持ち込まれた場合も変異を起こす。これらの関係をどのように処理するか、すなわち、欧米に由来する言語学理論が日本に持ち込まれた後に一定の変異を起こしている状況下で、我々中国人はどのように独自の視点に基づき、自身の研究目的のために

これを積極的に理解・吸収し、日本語研究に効果的に応用するか。また、中国国内の言語学界の研究者とどのように円滑かつ効果的に対話・交流を行うか。これらは我々が絶えず探求すべき重要な課題である。この意味において、概念を明確化することを基礎とした用語の規範化作業は、上記の課題を解決するための重要な一環をなし、言語学の問題をより深く研究・探求するための根本的な前提ともなる。

本研究で明らかになった用語翻訳の複雑性は、今後の課題として、概念の整合性を中核にすえた標準化用語データベースの構築の必要性を浮き彫りにした。また、このような複雑な判断を支援するツールとして、人工知能技術の革新的応用にも大きな可能性が残されている。これらを通じて、より深い日中英学術対話の基盤形成に貢献したい。

#### 【参考文献】

- (1) 辻幸夫 (編) (2013) 『新編認知言語学キーワード事典』 研究社.
- (2) 山梨正明 (2021) 『言語学と科学革命—認知言語学への展開—』 ひつじ書房.
- (3) A.S.Hornby (編) 于海江、赵翠莲等 (译) (2023) 『牛津高阶英汉双解词典』 商务印书馆.
- (4) 成晓光・姜晖 (2008) 「Metadiscourse: 亚言语、元话语, 还是元语篇?」 『外语与外语教学』 第5期, 45-48.
- (5) 辜正坤 (1998) 「外来术语翻译与中国学术问题」 『北京大学学报』 第4期, 44-51.
- (6) 黄克武 (2014) 『中国近代思想家文库: 严复卷』 中国人民大学出版社.
- (7) Jack C. Richards (編) 管燕红、唐玉柱 (译) (2005) 『朗文语言教学与应用语言学词典』 外语教学与研究出版社.
- (8) 简瑞碧 (2005) 「乌也斯库尔生命符号学之历史沿革」 台北: 台湾大学.
- (9) 姜望琪 (2005) 「论术语翻译的标准」 『上海翻译』 第1期, 80-84.
- (10) 陆丙甫 (2009) 「从某些语言学学术语的翻译谈起」 『外国语』 第2期, 2-7.
- (11) 陆谷孙 (編) (1993) 『英汉大词典』 上海译文出版社.
- (12) 罗耀华・周晨磊 (2011) 「语言学学术语翻译及相关问题探讨」 『中国科技术语』 第3期, 23-27.
- (13) 潘钧 (2021) 「日语语言学学术语规范问题再思考」 『日语学习与研究』 第3期, 92-101.
- (14) 上海外语教育出版社 (2004) 『牛津英语大词典』 上海外语教育出版社.
- (15) 宋志平 (2000) 「语法梯度理论的研究及其意义」 『外语与外语教学』 第11期, 56-58.
- (16) 唐珂 (2013) 「论“Umwelt”概念的传承流变」 『江汉论坛』 第7期, 59-63.
- (17) 徐国栋 (2015) 「从“地方论”到“论题目录”——真正的“论题学法学”揭秘」 『甘肃社会科学』 第4期, 197-203.
- (18) 徐建国 (2021) 「术语规定论与术语描写论的命名观对比研究」 『中国科技术语』 第1期, 10-16.
- (19) 张丽芳 (2017) 「从信息技术视角看术语翻译的接受度——以认知语言学学术语 embodiment 为例」 『安徽文学』 第1期, 87-88+101.
- (20) 张琳琳 (2019) 「雅克布・冯・魏克斯库尔“主体环境域”理论研究」 济南: 山东大学文学院.
- (21) 郑述谱 (2012) 「术语翻译及其对策」 『外语学刊』 第5期, 102-105.
- (22) Austin J. L. (1962/1975) *How to Do Things with Words*. Oxford: Clarendon Press.
- (23) Kuhn, Thomas S (1996) *The Structure of Scientific Revolutions*. Chicago: University of Chicago Press.
- (24) Nida, Eugene A. & Charles R. Taber. (2004) *The Theory and Practice of Translation*. Shanghai: Shanghai Foreign

Language Education Press.

- (25) Rogers M. (2004) “Multidimensionality in concepts systems: A bilingual textual perspective.” *Terminology*, 2: 215-240.

#### 【生成 AI の使用について】

① 使用した生成 AI の情報

名称：DeepSeek

バージョン：最新バージョン（2025年11月現在）

製造元：深度求索（DeepSeek）公司

② 具体的な使用方法

論文の初稿完成後、日本語表現の校閲・修正を目的として使用いたしました。具体的には、文法誤りのチェック、学術的な表現への潤色を補助的に行いました。

③ 使用したプロンプト

「これは私の学術論文です。日本語の文法誤りがないか確認し、修正してください。また、学術的な用語を使用し、論理が自然で言語が流暢になるように表現を潤色してください。」

④ 補足説明

なお、AI による言語潤色は初稿段階での補助的な利用であり、提出いたしました最終稿は日本語母語話者による十分な校閲を経ております。

（だん せいぎ：北京市北京第二外国語学院 講師）

Abstracts

## Japanese-Chinese Translation of Cognitive Linguistics Terminology Mediated by English: The Interface Between Theory and Practice

Duan JingYi

This study investigates the translation of Japanese cognitive linguistics terminology into Chinese, a process complicated by terms being assimilated via English as either kanji-based translations or loanwords. It establishes a novel framework employing English as a “mediating language” for conceptual alignment. Based on descriptive terminology and functional equivalence theory, the research employs a “Japanese → English → Chinese” verification process, analyzing cases including “gradience,” “Umwelt,” and “embodiment.” Results demonstrate that this methodology effectively eliminates orthographic bias, enables reconstitution of terms based on core concepts, and promotes the creation of terms with greater international commonality. This study provides a significant methodological contribution to interdisciplinary terminology translation, situated at the interface of theory and practice.

**Keywords:** terminology translation, mediating language, cognitive linguistics, conceptual alignment, Japanese-Chinese comparison